長期入院児家族のための絵本の読みあいによる支援プログラム ―実施方法について―

西　隆太朗[※1]・村中　李衣[※1]・松下　姫歌[※2]

A Support Program for Long-Hospitalized Children and Their Family through Mutual Reading of Picture Books: Consideration of a Method

Ryutaro NISHI, , Rie MURANAKA and Himeka MATSUSHITA

When children are hospitalized for a long time, caring them and their family is important, not only medically but also psychologically. The authors are planning to make a new support program for them through mutual reading of picture books. With the aid of supporting staffs, children and their family enjoy reading picture books, and the video recording of the scene can be a reminiscent that unites them with shared pleasant and caring experiences. A method for practice and research of this program is examined and explicated in detail.

Key words : picture book, mutual reading, hospitalized children and their family

1. 問題―離れて暮らす家族に対する物語を通した支援

子どもが長期入院を体験するとき、その子にも、家庭にも、さまざまな心の揺れが生じる。患児本人への心理的サポートだけでなく、家族や入院児のきょうだいに向けた心理的支援が必要になる。一緒に暮らすことができず、日々の面会も制限される入院児と、保護者やきょうだいとのつながりをどう支えるかが、これからの課題である。このような情緒的交流を支えていく上では、直接的な言葉でメッセージを交わすことも重要な手段ではあるが、イメージや物語、体験を通じたコミュニケーションも重要だと考えられる。

こうした支援はさまざまに開拓されつつあるところだが、それを対象とした研究はいまだ数少ない。著者の一人である村中は、児童文学者として、自ら相手とかかわる絵本の読みあいを通して、病院や矯正教育の現場等でのケアを実践し、研究してきた。村中は意図的に「読みあい」の語を用いているが、一般に言われる絵本の「読み聞かせ」が、ともすれば一方的な語りかけを連想させるのに対して、「読みあい」は、

キーワード：絵本，読みあい，入院児とその家族
※1　本学人間生活学部児童学科
※2　京都大学大学院教育学研究科

より対等で相互的な関係を意味するものである。さまざまな現場における実践の経験からは、「読みあい」による物語を通したかかわりが、情動的なケアを可能にすることが示されてきた（村中 , 2002a, 2002b, 2005, 2011, 2013）。「読みあい」について、村中は次のように語っている。

> 「読みあい」はそのかたちや方法が決まっているわけではありません。
>
> ひとりひとりでゆっくり向かいあって絵本を楽しむこともあれば、教室でたくさんの子どもたちと一緒に絵本を読んでいる途中で、ふいに子どもたちの心がひとつの波のようになって、読み手の胸の中に入りこんでくることもあります。
>
> どんなにすてきな絵本を子どもに読み聞かせる事ができても、その瞬間ふわっと心浮き立つ思いを子どもと一緒に共有できなければ、その読みの場が幸福の場として子どもの内側の記憶に記憶されることはないでしょう。（中略）
>
> 「読みあう」ことで、絵本や子どもの本があらゆる強制から解き放たれ、関わるすべてのひとが、ゆるやかにつながっていく世界が開けていく、ひとつの方法であると心から願っています（村中 , 2012）。

こうした「読みあい」観は、人と人がいて絵本を読むという行為が、単なる物語の伝達ではなくて、人と人とのかかわりに支えられ、互いの関係性の深まりとともにあるという事実を指し示している。また、読みあいに伴う感情体験や関係性の深まりは、マニュアル化されたり教条主義的に決められたやり方によってではなく、人間どうしの自然な交わりや、文学的感受性や想像力を通して生まれるものであることが理解されるであろう。絵本をともに読むのに、打ち解け合える関係性や、自由で文学的な想像力が重要であるのは当然のことであるはずだが、マニュアル化された方法の次元とは違って、目に見えなかったり、あえて言葉にされなかったりする側面は、しばしば研究者・実践者の視野からこぼれおちてしまう。こうした危険性から言っても、村中が指摘するような自由な想像力・関係性の展開が重要だと考えられる。

ケアが関係性の営みであることからは、絵本の内容やマニュアル的な実施方法以上に、援助者が、子ども達や家族とどのようにかかわるかが重要になってくる。よりよいケアのあり方を考えるためには、読みあいの実践事例について、関係性の観点から詳細に理解していくことが必要になるであろう。共著者の西・松下は、臨床心理学・臨床教育学の立場から、イメージや物語を通じて子ども達と信頼関係を築き、事例の詳細な分析を通して、関係性の展開を理解する研究を続けてきた（西 , 2014；松下 , 2015）。また、狭義の心理臨床の場を超えて、子どもとのケア的なかかわりについて臨床的分析を行うための方法論についても、研究を進めてきた（西 , 2013）。こうした観点からの分析は、読みあいを通しての支援場面についても新たな理解をもたらすことが期待される。また、実践という共通の基盤によって文学と臨床心理学が結ばれるという、これまでにない形での学際的研究が可能になると考えられる。

こうした問題意識から、本研究では入院児家族に対してこれまでほとんどなされてこなかった、絵本を用いた新たな支援プログラムを考案し、その実施方法について検討する。このプログラムは、以下のような意義を持つと考えられる。

(1) 対象者が受動的に支援される形だけでなく、絵本の読みあいに参加する能動

的な体験を取り入れている点は、対象者が持つ力を生かすことのできる本プログラムの特色である。

(2) 言葉の次元での伝達だけでなく、それを超えて、絵本という媒体を用いて、また実際に思いを込めて読む体験をすることで、イメージや物語、体験を通して、日常的会話を超えた情動的交流が促される点も、他に類を見ない取り組みである。

(3) 本プログラムが参照している "Storybook Dads" は、もともとイギリスで離れて暮らす家族の再統合を支援するものだったが、この手法を日本に取り入れ、異なる領域に応用する点も、他にない実践となる。

2．目的―実施方法についての考察

長期入院児とその家族のために、絵本の読みあいを通した新たな支援プログラムを築いていくために、まず本研究において、実施方法についての考察を行う。現在すでに筆者らは病院での実施を始めつつあるところである。過去に行われた読みあいの一端にも触れることがあるが、具体的な詳細については機会を改めて発表することとし、ここでは実施方法についての検討を主な目的とする。

なお、本研究は公益財団法人三菱財団平成 27 年度助成金の支援を得て行うものである。

3．方　法

本研究では、絵本の読みあいによる支援プログラムとその実施方法について考察するための方法として、(1) 先行する研究および実践、(2) これに基づく新たな支援プログラムの具体的な実施方法を検討する。またこれを踏まえて、(3) 今後の課題について考察する。その概要は以下の通りである。

(1) 本研究の先行研究にあたるものとして、物語を通した子ども達への支援については村中が実践と研究を重ねてきている。物語を通して家族をつなぐ支援については、イギリスで実施されている "Storybook Dads" などが挙げられる。これらの概要を示した上で、本研究で対象とする長期入院児とその家族にとってどんな示唆が得られるかを示す。

(2) 本研究における支援プログラムは、入院児に一方的に「読み聞かせ」る形よりも、むしろ子ども自身が主体的に楽しんだり、援助者と相互的にかかわる点を特色としている。したがって、子どもが心を開くことができ、子ども自身の主体性が生かされる、柔軟なかかわりが求められる。そのために必要な実施方法について検討する。

(3) 今後の課題について、開始しつつある実施経験なども参照しつつ考察し、また事例検討のあり方についても論じる。

4．実施方法について

(1) 村中の「読みあい」実践から

村中は児童文学の実作者・研究者であると同時に、長年にわたって小児病院の子ども達と絵本を読みあう実践を行ってきた。大学病院に入院する子どもへの読書療法に始まり、トロントの子ども専門病院における病院図書館サービスからの示唆を受けながら、日本でも入院中の子どもと絵本の読みあいを通してかかわる中で、独自のケアを積み重ねてきた（村中 , 2002a）。こうした実践は、病院・施設でのお年寄りとの読みあいや（村中 , 2002b）、近年では美祢社会復帰促進センターにおける女性受刑者との読みあいを通した支援へと展開している（村中 , 2013）。

こうした読みあいの実際は、村中の著書に多数の事例として詳しく描き出されてい

る（村中，2002a）。これらの事例を通して、読みあいの実践において援助者が重視すべき点を3つ挙げることができる。

①読みあいを支える信頼関係の重要性

子ども達が読みあいを楽しめるように、そしてそれがケア的な体験となるためには、ともに読みあう援助者との間に、安心してかかわれる信頼関係がなければならない。ときには、突然現れる援助者に対して子どもが不安や抵抗を感じることもあり、援助者はそうした子どもの感情を受け止めることが必要になる。援助者は、子どもの気持ちを和らげるかかわりをすることが必要だが、同時に、子どもの抵抗感をなくすべきものとして否定するのではなく、ありのままに受容していく力が求められる。こうした信頼関係の構築は、言葉による説得などよりも、出会うとき、絵本を読み始めるときなどのふとしたやりとりの中で進められていくが、その過程が村中の事例にはさまざまに描き出されている。

②一人ひとりの子ども、一回一回の出会いが個性的なものであること

上に述べたような、読みあいを支える信頼関係を築く過程は、どの子にも一律に進むようなものではない。一人ひとりの子どもも、一回一回の出会いも、個性的でかけがえのない機会である。さらに言えば、援助者もさまざまな個性を生かして子どもとかかわるわけだから、子どもによって、援助者によって、状況によって、それに応じた実践がなされるものであり、単純にマニュアル化することはできない。読みあいの実践を深めていく上では、一律のパターンを求めることよりも、一回一回の出会いの中に生まれる個性的な展開の過程やケア的な意義を見いだしていく、いわば「事例を読む目」が必要であり、事例研究を深めていくアプローチが有効だと考えられる。また、こうした個性的な展開に応じるためには、援助者にもそのときどきに応じた、柔軟で創造的なかかわりが求められる。

③物語やイメージを通して伝えられる情動や感覚が持つ意義

読みあいによるかかわりは、無媒介な人間関係とは違って、物語やイメージを通して関係が深められるところに特徴がある。ときに物語やイメージが、子どもが体験しているさまざまな感情やその重み、そして現在の援助者との関係性と呼応してくることもある。したがって実践する上で、また事例を理解していく上では、直接的なやりとりだけでなく、こうした物語やイメージの世界での心の動きやコミュニケーションを受け止め、感じ取っていく必要がある。こうした次元で実践と関係性を捉える上では、文学的想像力と臨床的解釈が生かされるものと考えられる。本研究の学際的アプローチは、こうした側面を新たに明らかにするであろう。

(2) Storybook Dads からの示唆

村中による読みあいの実践は、子どもを直接の対象とするものであったが、長期入院児が置かれた状況を考えると、離れて暮らす家族とのつながりについての支援も必要になってくる。一緒に過ごす時間が限られた家族に対する、絵本を介した支援のあり方として、イギリスで行われているStorybook Dadsが示唆的である。以下に、主にStorybook Dadsの公式サイトをもとに、その概要を示す。

Storybook Dadsは、イギリスで行われている家族支援のプログラムである。親が刑務所に収監されてしまったために、親と会えないで過ごす子ども達が、イギリスには20万人以上いるという。このプロ

グラムは、父親が絵本を読む情景を動画に収め、DVD や CD の形で子ども達に贈ることを主な活動としている。2002 年に始まったこの活動は発展を続け、支援を受けた人々は 2014 年現在で 14750 人に上る。また、同様の方法で母親を対象にした "Storybook Mums" も展開されており、これらの活動の意義は、受刑者支援としてはもちろん、成人教育の一環として、また図書館学的な見地からも評価されてきている（吉野 , 2006; Parkinson, 2007; Rankin & Brock, 2009）。さらに、この活動に触発された別の団体が、家族と離れて働く兵士達を対象とした "Storybook Soldiers" を開始したことは、絵本を通じた支援が受刑者に限らず広く意義あるものであることを示唆するものである（Stanistreet, 2007）。

Storybook Dads と本研究は、対象や状況もまったく異なるものである。しかし、会う機会がなかなか得られない家族の情緒的なつながりを、物語を通して支援していく点は共通している。村中がすでに絵本や物語を通して受刑者への支援を行う実践を行ってきたこともあり、Storybook Dads における支援方法から、本研究への示唆を得ることが可能だと考えられる。

Storybook Dads の場合は、DVD や CD のような作品を、親自身が主体的に仕上げていくことにも重きが置かれている。絵本をただ読むだけでなく、語りやすくするために、パペットを用いることが多い。識字が困難な親の場合は、スタッフが必要な支援を行ったり、自分で物語を作ったり、あるいは同じ受刑者の仲間からの協力を得て動画を作成するが、そのことが親自身の再教育の機会にもなる。さらには映像を編集し、音楽や効果音を入れるなど編集作業も親自身が取り組むことで、達成感も得られ、識字やコンピューターの活用など、社会復帰の助けとなるスキルの向上も見られる。実際に、社会復帰後にこうしたスキルを生かして再就職することができた例も出てきている。

親自身にとっても、子どもにとっても、このプログラムは肯定的な体験となっている。創始者である Sharon Berry は、次のように語っている。「作品が贈られることで、子ども達には、親が自分を愛していること、会えなくて残念に思っていること、そして自分が親にとって大事な存在だということが分かります。〔中略〕作品を手にしていることで、子ども達は力づけられます。いつでも好きなときに ― 親がいなくてつらいとき、寂しいときに、CD を聴くことができます。子ども達は CD をとても誇りに思っていて、学校によく持って行ってはみんなに見せているのです」（McHugh, 2006, p.31）。まわりの子ども達も、自分もこんな CD が欲しいと、好ましく思うようである。

先に信頼関係の重要性について述べたが、人と人との直接の関係ばかりでなく、その関係から生まれた「もの」が存在することも、意義あるものと考えられる。「もの」は、体験をまわりの人々と共有する通路となりうる。また、信頼関係を象徴する「もの」があることは、相手がいないときにも心を支える「移行対象（transitional object; Winnicott, 1953）」としての意義を持ちうるであろう。

Storybook Dads から得られる示唆を本プログラムに活かしていく上では、その共通点・相違点を考慮しておく必要があるだろう。Storybook Dads では、親の社会復帰への意欲やスキル向上を考え、親が主体的に取り組むこととなっている。本プログラムはそれとは状況が異なっているが、対象者が受動的に支援を受けるのではなく、主体性を発揮できる点は重要だと考えられる。したがって、読みあいを楽しむのは子

どもであったり、親であったり、その家族が主体的にかかわれる形になるように、状況に応じて柔軟に対応することが必要になるだろう。

また、子ども達と家族の情緒的なつながりが焦点となるため、スキル向上や知的教育といった側面よりも、情緒的体験や、読みあいの中で生まれるかかわりを重視することになる。その際には、子どもと家族の心の動きを理解するだけでなく、援助者の心あるかかわりが求められるであろう。Storybook Dadsの報告では、実施した結果としての親や子ども達の達成感や思いが語られることが多いが、それだけでなく、援助のあり方を考える上では、読みあいの場面で生じる事態や体験を、詳細に理解していく事例検討が有用だと考えられる。

(3) 本プログラムの実施方法について

これらを踏まえて、本プログラムの具体的な実施方法について検討する。

①概要

入院児や家族が絵本を読む様子を動画に収め、離れて暮らす相手に届ける実践を行う。家族から入院児に動画が届くとき、入院児にとっては、会う時間が限られている家族から、絵本を媒介とする情動的コミュニケーションを受け取れること、また動画という形を採ることで家族の思いを繰り返し味わえることが、情動的なサポートになる。家族にとっては、新たな形での子どもへのケアに主体的にかかわり、子どもが動画のプレゼントを喜ぶ様子を知ることで、新たに支えられる。入院児から家族に動画が届けられるときにも、同様の形で情緒的なつながりが深められる。また、入院児と家族を支援してきている病院ボランティアなどにも、新たなケアの手法を提案することができると考えられる。

支援を実践する過程で、入院児と家族へのインタビューを行い、その効果と意義を検証する。このプログラムを体験する中では、入院児にも家族にも、さまざまな心の動きや揺れが生まれると考えられる。こうした心の動きは、「支援がよかったか、よくなかったか」を質問紙等で訊ねるといった直接的な応答だけでなく、読みあいの場面での語りやインタビューの端々ににじみ出る部分が大きい。したがって、読みあいの場面で起きてくる事態や体験、インタビューの中での語りに耳を傾ける、臨床心理学的な観点から、対象者の語りを繊細に理解していくことにより、プログラムの向上を図っていく。

②実施過程

本プログラムを実施するにあたり、次のような流れでの実施を予定している。

すでに述べたように、本プログラムでは対象者の体験が意義あるものになることと、対象者の主体的な参加が生かされることを重視するため、実際の実施時においては、対象者の状況に合わせた柔軟な対応を行う。そのため、以下に予定として示す実施過程についても、決して一律の機械的な対応ではなく、上記のような観点からの柔軟な変更を行うことがある。

(a) 実施準備

プログラムの実施に用いる絵本と、絵本を読む補助として使えるパペットを選定する。絵本のテキストについては、対象者家族による読みを動画にして届けることから、電子化して使用する許諾を出版社から得ておく。

また、プログラム実施後の家族間コミュニケーションを助けるためのシートについて様式の検討を行い、作成・印刷する。

家族が絵本を読む様子を動画で届けるた

め、これに使用するカメラ、タブレット、また大容量の動画を保存できるハードディスクやバックアップ装置など、動画データ作成・管理のための体制を整える。

(b) 協力依頼

本プログラムについては、二つの病院からの承諾を得て、実施を行う予定である。両病院での打ち合わせを行った上、実際にプログラム参加を希望する家族を募って協力を依頼し、承諾を得る。プログラムの実施から得られる事例をエピソードとして本研究に用いること、またその他の目的で使用しないことについて、了解を得る。

(c) 読みあいの実施

被験者の協力により、絵本の選択・読みの練習を行った上、家族による絵本の読みを動画に収録する。

必要に応じて編集を行った上、この動画を入院児に届ける。その際の反応を丁寧に受け止めるとともに、このプログラムでの体験がどうだったか、入院児と家族へのインタビュー調査を行う。

〈最初の出会い〉

プログラムに協力する内諾を得た家族に、実際に出会って読みあいの体験をしてもらった上で、正式な承諾をいただくこととする。

最初の出会いでは、実施者が絵本とパペットを用いて、入院児との「読みあい」を行う。パペットを用いることで、子どもが一緒に遊ぶような気持ちでかかわることができ、実施状況にもラポートが生まれることが期待される。できれば家族にも、一緒に参加してもらうし、プログラムを体験的に理解してもらうとともに、その時間そのものも援助的なものとなることを目指す。

プログラムの概要について、口頭と文書により改めて説明し、了解を得る。同時に、家族が現在抱えている思いや悩みなども、可能な範囲で聴きとる。次回読みたい絵本についても、子どもと家族に選んでもらう。

〈絵本の読みあいによるコミュニケーション〉

入院児とパペットを用いながら絵本を読みあい、その様子を録画する。家族とも同様に、絵本の読みあいを録画する。いずれも読みあいの時間は、主体的に楽しめるだけの時間を取りつつ、対象者に無理のない範囲とする。このようなセッティングにおいて、子ども達・家族に、前回以上に主体的に、読みあいを体験し、楽しんでもらう。

読みあいの場面を収めた動画を、入院児と家族に見てもらう。病院に来られない家族には、自宅で見てもらえるようにDVD等の媒体を用意する。その後、家族・入院児にインタビューを行う。

また、入院児と家族が、動画の感想を相手に伝えるなど、イメージを自由に広げながらメッセージを交わすことを促す、コミュニケーション・シートに記入してもらう。

より具体的なイメージを示すために、村中がこれまで行ってきた読みあい実践の様子を挙げる。

図1　読みあいにおける身体的呼応

図1からは、子ども自身が読み手でありつつ、同時に援助者である村中自身も読みに参加し、それがたとえば思わず知らず呼

応する身体の動きとなって表れていることが窺える。このように、とくに子ども自身が楽しめる時間とするためには、援助者と心が通じあうこと、また自然発生的な感情や体験を生かしていくことが重要だと考えられる。

図２　パペットを用いた読みあい

図２で村中は、犬のパペットを手にして語りかけている。援助者が面と向かって子どもとやりとりするだけでなく、こうしたパペットの助けも借りつつ読みあうことで、子どもの心が開かれることがある。援助者と子どもの関係は、ともすれば「大人対子ども」といった、素直に情動を表現しにくいある種の上下関係に陥るかもしれない。子どもと援助者とのラポールが築かれるためには、第一に援助者自身のあり方やかかわり方が問題になるが、パペットがあることも、常識的な「大人対子ども」を超えた、想像力の次元を含み込んだかかわりを可能にする一つの通路となりうるであろう。

〈インタビューと省察〉

後日、入院児と家族に、互いについてのコミュニケーション・シートを渡し、インタビューを行う。また、動画、インタビュー、コミュニケーション・シートをもとに事例研究を行い、プログラムの改善を進める。

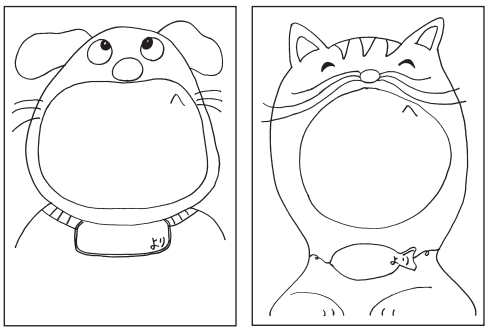

図３　コミュニケーション・シートの１例

図３は家族がやりとりするコミュニケーション・シートの１例である。相手へのメッセージとして、「～へ」とあらかじめ宛名を記入する部分があるが、内容は自由に書けるようになっている。イラストが与える雰囲気は、理念や形式による言葉よりも、体験的・情動的・イメージ的なコミュニケーションを促すためのものであり、こうした観点からシートの工夫をさまざまに考えることができる。

③ 事例検討

プログラムで作成した動画や、実施後のインタビュー等を逐語録・エピソードにまとめ、コミュニケーション・シートの使用結果などを取り入れて、事例検討を行う。逐語録を作成する際には、情報を本研究の目的以外に利用しない条件で、協力者（関連領域の学生・院生等）にも依頼する。

事例の分析を通して、支援のあり方や実践方法について検討するとともに、臨床心理学的な観点から家族との関係・支援者との関係を含めた分析を行う。支援者のかかわり方などについての考察を深めることにより、プログラムの向上を目指す。

５．今後の課題

(1) これまでの実施経験から

現在は研究の開始期であり、読みあいのセッションを数回持ち始めたところで、今

後インタビューなども行い、この実践をより多くの対象者へと広げていく予定である。そのため資料はまだ十分ではないが、これまでの実施経験からは、個々の子どもや家族、また毎回の実践状況、それぞれの思いはきわめて多様であるため、何よりも柔軟な対応が重要だと考えられる。

子どもが読みあいに参加するとき、それが子ども自身にとって主体的に楽しめる体験となるためには、その子一人ひとり、そのときどきに応じたかかわりが必要になる。やりなさいと言われてやるようでは、情緒的な支援にはなりえないだろう。読みあいに誘われた瞬間、「いやだ！」と宣言する子もいるが、それが必ずしも絶対的なノーであるわけではない。子どもは、援助者がどんな人であり、自分の思いをどんなふうに受け止めてくれる相手なのか、試しているのである。その「試し」に込められた子どもの思いを受け止め、楽しんでかかわれる人なんだと子どもが感じられるよう応えるとき、思いがけない形で子ども自身が新しいかかわりを提案し、読みあいのセッションが展開していくことがある。このプログラムを実施する上では、画一的な実施方法やマニュアルを作成するのではなく、このように一人ひとりの思いを受け止める、繊細かつ創造的な、臨床的かかわりを明らかにしていくことがもっとも重要だと考えられる。

(2) 事例検討のあり方について

したがって事例検討においても、こうした援助者と子ども・家族との具体的なやりとりをもとに、そのかかわりのありようを理解していくことが第一の焦点と考えられる。また、援助者自身のかかわりを問うことが、体験を重視した効果検証をも可能にするだろう。

また、実践における事例検討は、いわゆる「研究」の形で、紙に書き出されたプロトコルをもとになされるだけとは限らない。むしろ援助者は実践の中で、リアルタイムに展開する対象者とのやりとりの中で、相手を理解し、自らのかかわりの妥当性をも検討しながらかかわっているのである。すべて言葉にし尽くされるわけではないにしても、言葉にしうる以上のものを含んだ、本来的な事例検討過程は、事例のただ中で展開するものと言えるだろう。

したがって、実践事例については、第三者が紙に書かれたプロトコルを処理するような形よりも、援助者自身が自分の事例検討を行い、対象者との関係性を理解していくことが重要だと考えられる。こうした関与観察者自身による研究については、しばしば主観性の問題が指摘されることが多いが、一方で、第三者にはアクセスできない、相手からの生きたフィードバックを直接に得ることができるという利点もあり、関係性を理解する上ではこうした側面が重要である（西, 2013）。必要なのは、主観性が恣意を脱することにあると言えるだろう。

主観性を生かした、実践者自身による事例研究のあり方は、実践を離れた分野においてはほとんど研究されてこなかった。一方で、実践そのものを対象としてきた歴史を持つ心理臨床学的研究（Erikson, 1964；Langs, 1978）や、人間学的保育学的研究（津守, 1999；西, 2013）では、その方法論への考察が進められてきた。本研究ではこれらに依拠しつつ、実践の中で広がるイメージの展開に、さらに文学的な観点からの検討を加えることによって、その内実を豊かなものにすることができるであろう。また、実践という基盤を共有する中で、このように心理臨床学、保育学、文学による学際的研究を進めることにより、実践理解の方法論についてもこれまでにない新たな示唆が得られると考えられる。

引用文献

Erikson, E. H.: The nature of clinical evidence. In *Insight And Responsibility*. New York: W. W. Norton & Company, 1964.

Langs, R.: *The Listening Process*. New York: Jason Aronson, 1978.

松下姫歌：個性を生かす教育を考える―臨床心理学的観点から考える発想の転換．京都大学大学院教育学研究科 平成24年度成果報告書 E. FORUM 全国スクールリーダー育成研修，2015，pp. 68－88

McHugh, J.: Inside Story. *Public Finance*, (May 19-May 25, 2006), 30-32.

村中李衣：子どもと絵本を読みあう，ぶどう社，2002a.

村中李衣：お年寄りと絵本を読みあう，ぶどう社，2002b.

村中李衣：絵本の読みあいからみえてくるもの，ぶどう社，2005.

村中李衣：村中李衣の読みあいってなぁに? http://www.kodomonohiroba.co.jp/rie/yomiai.htm（2015年11月10日取得）

村中李衣：矯正教育現場における「絆プログラム～絵本の読みあいを通して～」の可能性，矯正教育研究，58，27－33（2013）.

村中李衣：矯正教育の現場で絵本を読む，絵本学講座4，朝倉書店，印刷中．

西 隆太朗：保育者の省察に基づく事例研究の方法論―子どもたちとのかかわりを通して―．乳幼児教育学研究，22，53－62（2013）.

西 隆太朗：絵本を通して子どもと関わること―2歳児クラスでの相互的関係とイメージの展開―．保育の実践と研究，19（2），68－79（2014）．

Parkinson, D.: Let me tell you a story. *Adults Learning*, 19(2), 18-20 (2007).

Rankin, C. & Brock, *A.:Delivering the Best Start: A Guide to Early Years Libraries*. London: Facet Publishing, 2009.

Stanistreet, P.: Storybook soldiers. *Adults Learning*, 19(4), 24-26(2007).

Storybook Dads http://www.storybookdads.org.uk/index.html（2015年9月14日閲覧）

津守 真：保育研究転回の過程．津守 真・本田和子・松井とし・浜口順子（著）人間現象としての保育研究 増補版　光生館，1999，pp. 3－42.

吉野 智：再犯防止はスクラムを組んで―英国における犯罪者処遇のパートナーシップ―（2）関係機関、非営利団体との協働による処遇の質の向上策．刑政，117（10），52－66（2006）.

Winnicott, D.W.: Transitional Objects and Transitional Phenomena—A Study of the First Not-Me Possession. *International Journal of Psycho-Analysis*, 34, 89-97 (1953).